

政治改革と災害史観の影響

平成という時代空間の中に、昭和はどのような影を映しているか。あるいは昭和が因となって生み出された事象や理念は平成の年表にどう刻まれているか。このところ私は各種の講演でこの類いのテーマを選び、話を進めている。

そのために平成28（2016）年の今、昭和と比べてどのような変化が起こっているか、そのことを整理することにしている。大まかではあるが箇条書きにしてみよう。

（1）政治と政治家の著しい変化（2）討論や議論の衰退（3）感情的な単語での事態処理（4）人間関係の無機質化（5）紙文化よりスマホ文化（6）手づくりの文化と伝統の変質（7）戦争についての考え方の変化 ―。このほかにもいくつか挙げられるが、この七つの現象が顕著ではないか。昭和のもっていた社会の特徴は、近年になって急速に薄れている。

このような平成という時代の特徴は何が因になっているのか、解く鍵は何か、と考えると、次のことに思いが至る。

（イ）55年体制の崩壊（ロ）3・11などの災害史観（ハ）昭和天皇と今上天皇（ニ）少子高齢化社会の到来（ホ）メディア観の変化 ―。この五つの鍵がそれぞれ重なり、ときに補完し合って前述のような社会現象を作り得ているのではないかと私には思える。

本稿では紙幅の関係もあるが、この五つのうちの（イ）と（ロ）に触れておきたい。つまり、平成にみられる政治状況と社会状況、文化状況にもこの2点が反映しているとの意味である。私は昭和と平成を比べるとその政治状況は大きく様変わりしていると思う。政治家が劣化していると解釈してもいいのだが、これは55年体制の崩壊、自民党・社会党・新党さきがけの連立政権前後の政治改革（小選挙区比例代表並立制の導入）に端を発している。つまり昭和の政治の基軸だった55年体制は、平成5（1993）年の非自民8党派による細川護熙内閣の誕生によって崩壊した。そして翌年には8党派による抗争の結果として、自民党・社会党が中心となって村山富市内閣を誕生させた。

このことは何を物語るだろうか。今にして思えば昭和の55年体制は実はなれ合いであり、表では対立しているかに装いながら、日本が東西冷戦下を生き抜く知恵として、裏では内々に話をつけていたのである。村山内閣の誕生はそのことを証明してみせたにすぎない。野合を隠すための演出だったといえようか。しかしとにかくこの段階で、昭和の政治は終わったのである。

そして始まった平成の政治はどうだったか。政治改革とは名ばかり。比例代表制のひどさ。名簿に名を連ねるのは名前を貸しただけ、それで当選というのだから、政治家のレベル以前に人間としての資質が問われる者さえ出てくる。

日本は小選挙区制に向いていない。多様な意見が存在するのだから、といった論議は守旧派として疎外される時代が異常だったことが、見事に証明された。平成の政治は30%ほどの得票で政治権力が握れるのだから、まさにファシズムの温床と化している。

次いで平成を分析する鍵は災害史観である。平成7（95）年の阪神大震災を端緒としつつ、同23（11）年の東日本大震災によって、私たちの国と国民一人一人は改めて災害史観という人生観、死生観、歴史観、国家観を持ったといえまいか。もとよりこの災害史観は1923年9月の関東大震災に端を発している。この史観は、第一には日本社会の残酷さとながらって、自警団に代表される蛮行が国際社会を驚かせた。第二には、日本人の価値観に大きな変化を促した。

作家の正宗白鳥は「数分間の大地の震動のために、文化的設備がすべて壊されて（略）人間が何千年で築いた文明の力の薄弱なことがつくづく感ぜられました」と書き、田山花袋は「私はつくづく自然の大きさといふことを感ぜずにはみられなかつた」と書いた（いずれも「婦人公論」23年10月号）。

社会運動家の賀川豊彦は、徳川時代の救済事業のほう完備していたといい、「文明と共に日本国民はその恩沢に慣れて、災厄に対する何等の準備をしてゐなかつた」（「改造」24年9月号）と指摘している。

関東大震災後の災害史観は、昭和のエログロナンセンスの伏線にもなっている。

この災害史観と比べると、平成の災害史観では、第一の日本社会の残酷さは被災地でまったく見られない。その整然とした光景は、私たちの国が政治的、社会的にはきわめて健康体だったと示した。

しかしこの災害を同時代で経験することで、国民の人生観や歴史観、社会観はまちがいなく変化している。天災と人災（東京電力福島第1原発事故）により、この社会の基盤が揺らいでいる（第二）。

3・11後の災害史観は、歴史の文脈の中で注視されていると自覚すべきなのだろう。